は、金蠅 *Phaenicia sericata* 肉蠅 *Sarcophaga peregrina*, 黒蠅 *Calliphora vomitoria* の3種の蠅の卵、幼虫を用い、ラッテに皮下 Myiasis を起さしめ24時間後、48時間後、72時間後について経過観察し些かの所見を得たので此処に報告す。(1) 上記各種の卵並びに第1, 2 齢幼虫を皮下に挿入創面閉鎖の場合、何れも Myiasis をみとめなかつた。(2) 上記各種の第1, 2 齢幼虫を皮下に挿入創面開放の場合、何れも Myiasis を認めた。特に金蠅例に於て、皮下広範囲の Myiasis を惹起し48時間後、72時間後に斃死するものも認めた。(3) 病理組織学的所見 皮下組織に細菌の感染と壊死をみとめたが、この壊死が細菌感染よりむしろ toxisch の影響によるものであると考えられる。(大阪市大・医動物)

小口胃虫の中間宿主に関する研究: 小林準三 Kobayashi, J. : Studies on the intermediate hosts of *Habronema microstoma*

小口胃虫 (*Habronema microstoma*) の中間宿主を調べるため、各種のハエに対して小口胃虫卵の捕食実験を行った。実験方法はよく成熟した小口胃虫の雌を解剖針で細かく切つて内容を出し、鏡検によりその胎虫の動いているのを確認してから、これを細磨した固型飼料にまぜ、水でよくねり、ハエの幼虫に捕食させた。実験に供したハエは全部で16種に及びこれらは予め卵から孵化させたものを固型飼料で育て、2~3 齢の幼虫に達したものを使用した。尚、ハエ以外のもので、小口胃虫卵を食う可能性のある種の昆虫に対しても捕食実験を行つた。捕食させたハエは羽化後、頭部、胸部、腹部の3部に分けて剖検し、胃虫仔虫の有無を調べたが、その結果、サンバエ、ノサンバエ、ノイエバエの体内に胃虫仔虫の發育しているのが認められた。サンバエ、ノサンバエでは共に高率に寄生が見られたが、中でもサンバエ体内の胃虫仔虫はよく發育しており、ノサンバエではやや劣つた。ノイエバエでは1例だけ胃虫仔虫の保有が認められた。次に自然界の胃虫感染状態を調べるため、千葉県三里塚御料牧場と、東京都内家畜衛生試験場に於て、昭和31年11月から昭和32年12月迄の14ヵ月間、毎月1回ハエの採集を行い、胃虫仔虫の保有状況を調べた。その結果、三里塚に於ては昭和31年11月と、昭和32年5月から12月迄の8ヵ月間、サンバエ体内に充分に發育した小口胃虫仔虫を保有しているものがあることが分つた。これに対し、家畜衛生試験場に於ては、同期間中、胃虫仔虫を保有するハエは見られなかつた。

(東医歯大・医動物)

種々な実験法によるイエバエ各系統の抵抗性比較: 安富和男 Yasutomi, K. : Values of the insecticide resistance of *Musca domestica vicina* due to different test methods

イエバエの抵抗性の度合を評価するには、LD₅₀ で比較する方法と、撒布基準量の有効成分を附けた面に接して中央致落下仰転時間 (KT₅₀) を求めたり、24時間後の死亡率を求める方法などがある。さらに、LD₅₀ の場合にも、微量滴下法 (Topical application) と、濾紙などに種々の薬量を撒布し、24時間接触させる方法とがある。演者はこれらの諸方法で、系統の異なるイエバエについて実験をおこない、実験法や条件の違いで、系統間の抵抗性の度合の差が、如何なる傾向を示すか検討した。DDT: Technical DDT 10% を含有する市販粉剤を基準量撒布 (有効成分 1.5 g/m²) した面に接触させた KT₅₀ では、高槻系統と、最も強い紋別淘汰系統との開きは1:1.9に過ぎなかつたが、濾紙面への Technical DDT アセトン液撒布法 (有効成分 2.5 g/m²) では、両者の開きは1:2.3であり、さらに、濾紙法による24時間後の LD₅₀ では、1:2.9となつた。また、微量滴下法において、Technical DDT では、高槻系、彦根系、福岡系はほぼ等しい値を示し、紋別淘汰系は高槻系の2.1倍を示した。純粹な p,p'-DDT を供試すると、高槻系、彦根系など、すべて、60γ で死亡率が僅かに30~32.0%という低率であつた。p,p'-DDT の効力が、Technical DDT に遙かに劣るのは、どの方法でも認められた。γ-BHC: 1%市販粉剤の基準量 (有効成分 0.15 g/m²) に対する KT₅₀ は、最も弱い高槻系に比べて、福岡系は6.7倍、彦根系は17.3倍という開きが見られた。微量滴下法による LD₅₀ では、高槻系に比べて、彦根系は42.3倍、福岡系は37.6倍を示し、LD₅₀ でも濾紙法による場合には、微量滴下法よりもこれらの開きが少なかつた。Dieldrin: 粉剤の撒布基準量 (有効成分 0.15 g/m²) の KT₅₀ 法で、最も感受性の高槻系に比べて、海老名系は23.1倍、福岡系は25.2倍、小櫃D系は39.7倍という数値を得たし、濾紙法による LD₅₀ でもほぼ同等の傾向が認められた。また、微量滴下法では、高槻系に比べて、彦根系は105.1倍という数値を示したが、小櫃D、袖ヶ浦、福岡、海老名の諸系統は、いずれも60γ で10~40%の死亡率という強度の抵抗性を示した。(予研・衛生昆虫)